

病害虫発生予察情報（12月予報）

令和2年11月25日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
ウンシュウ ミカン	ミカンハダニ	発生量：並	11月上中旬発生量：やや少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：多 (発病株率 15.2%)	11月中旬発生量：やや多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
	灰色かび病	発生量：並 (発病株率 3.5%)	11月中旬発生量：少（－） ただし、一部ほ場で多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：並 (発病株率 4.0%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 8.2%)	11月中旬発生量 黄化葉巻病：少（－） コナジラミ類：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋）
ダイコン	黒斑細菌病	発生量：やや少 (発病株率 1.1%)	11月中旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（±）
	白さび病	発生量：少 (発病株率 11.2%)	11月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（－） 降水量：並～少ない（±）
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：やや少 (発病株率 1.7%) アブラムシ類発生量：やや少 (寄生株率 4.6%)	11月中旬発生量 モザイク病：少（発生なし）（－） アブラムシ類：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（＋）
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率 0.5%)	11月中旬発生量：少（発生なし）（－） フェロントラップ誘殺数：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（＋）
	ナモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率：11.5%)	11月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並～少ない（＋）

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
キャベツ	黒腐病	発生量：やや少 (発病株率 5.2%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	菌核病	発生量：少 (発病株率 0.3%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：並～少ない(±)
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率 0.2%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	オオタバコガ	発生量：やや少 (寄生株率 0.02%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	タマナギンウワバ	発生量：やや少 (寄生株率 0.2%)	11月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	アブラムシ類	発生量：やや少 (寄生株率 0.5%)	11月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
タマネギ	腐敗病	発生量：やや少 (発病株率 0.2%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率 29.3%)	11月中旬発生量：少(-) 被害：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
ネギ (シロネギ)	さび病	発生量：やや少 (発病株率 3.8%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	黒斑病・葉枯病	発生量：やや少 (発病株率 1.4%)	11月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率 16.6%)	11月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	ネギハモグリバエ	発生量：多 (寄生株率 22.2%)	11月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
レタス (非結球 レタス を除く)	斑点細菌病	発生量：やや少 (発病株率 1.3%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	べと病	発生量：やや少 (発病株率 1.2%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率 1.7%)	11月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い(+)
	炭疽病	発生量：多 (発病株率 0.9%)	11月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い(+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率 1.7%)	11月中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：高い(+)
	ハダニ類	発生量：やや少 (寄生株率 15.4%)	11月中旬発生量：少 (-) 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (寄生株率 0.1%)	11月中旬発生量：少 (-) フェロモントラップ誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のご過去 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のご過去 10 年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の 1 か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【ウンシュウミカン】

<生育の概況>

青島の着色具合は平年並である。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 11月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は2.5%（平年1.8%）と平年よりやや多かったが、多発した1ほ場を除くと、全体的には平年並～少ない発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 収穫、剪定後、越冬虫を対象にマシン油乳剤を散布する。ただし、寒害を受けやすいほ場では3月とする。

<その他の病害虫>

●青かび・緑かび病

- ・ 11月上中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.8個/樹（平年0.7個/樹）、落果発病果数は2.5個/樹（平年3.4個/樹）と平年よりやや少なかった。
- ・ 本病は果実の傷口から感染するため、果実に傷がつかないように注意して収穫する。降雨直後の収穫は、果実に傷がつきやすく、病原菌が感染しやすくなるため避ける。また、収穫後は入庫時の予措を徹底するとともに、貯蔵中は点検を行い、発病果を除去する。

【カンキツ全般】

<その他の病害虫>

●黒点病

- ・ 枯れ枝で胞子が作られるため、樹冠内部の枯れ枝や園の内外に放置された剪定枝、切株などが伝染源となる。今年は梅雨が長く、黒点病の発生が平年より多かったため、多数の伝染源が形成されていると考えられる。
- ・ 整枝、剪定を適正に行い、樹冠内部の採光、通風を良好な状態を保つ。また、伝染源を適宜除去し、園内や園の周囲に放置しないよう徹底する。

●かいよう病

- ・ 本病の越冬病斑は重要な伝染源となるため、発生園では冬期中に夏秋梢の剪除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

●カイガラムシ類

- ・ 剪定後、越冬虫を対象にマシン油乳剤を散布する。ただし、寒害を受けやすい園地での散布は3月とする。

【チャ】

＜その他の病害虫＞

●チャトゲコナジラミ

- ・チャトゲコナジラミが多発している茶園では、冬期に越冬幼虫を対象に防除を行ない、来年一番茶時期の成虫の発生を抑制する。防除は、本種に適用のあるマシン油乳剤を用いて、幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。なお、赤焼病の発生が心配される茶園では、銅水和剤等の防除薬剤を散布後、1週間～10日程度のちにマシン油乳剤を散布することで、マシン油による赤焼病の発生助長を抑制することが出来る。

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並である。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は15.9%（平年12.1%）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加する）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・本県では12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は3.1%（平年0.9%）と平年より多くなったが、これは1ほ場で多発していたためであり、この1ほ場を除いた平均発病株率は0.1%と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加する）。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に撤去する。
- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.1%（平年2.8%）と平年より少なかった。
- ・ 本病の媒介虫であるコナジラミ類の平均寄生株率は16.8%（平年8.6%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫タバココナジラミの増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野生生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバココナジラミ成虫の新芽への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【ダイコン】

<生育の概況>

生育は平年並～やや早い。

●黒斑細菌病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.5%）。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（本病の発病適温は25～30℃、降雨は本病の発生を助長する）。

防除対策

- ・ 生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・ 病原細菌は、強風雨等による傷口から侵入するので、強風雨の前か直後に防除を行う。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.1%（平年4.8%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である）。

防除対策

- ・ 白さび病が多発するとワッカ症を併発することがあるため、は種時期の遅い作型では、葉での発病が少ないうちに予防散布を行うことが必要である（予防散布の防除適期は間引き後7～30日）。
- ・ 発病残渣は翌年の伝染源となるため、ほ場外に撤去する。
- ・ 排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率1.1%）。
- ・ 本病の媒介虫であるアブラムシ類の平均寄生株率は0.7%（平年4.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、アブラムシ類の発生を助長する。

防除対策

- ・ 雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外で土中深く埋めるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本種の発生は認められなかった（平年寄生株率0.3%）。
- ・ フェロモントラップによる本種の誘殺状況は、平年より少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 雨が降らない日が続くと急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、多発している場合は薬剤防除を実施する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.6%（平年7.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、薬剤防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

生育は平年並～7日程度進んでいる。

●黒腐病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、下葉にわずかに確認されたが、調査対象の結球葉での発生は認められなかった（平年発病株率3.3%）。本年は台風の通過がなく、強風雨による影響がなかったためと推察される。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は、例年12月まで発生が見られるため、強風雨があった場合には、直後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・ 被害残さは感染源となるため、ほ場外で地中深く埋めるなどして適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・ 本病は気温20℃前後で雨の多い年に発生が多い。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 本病は例年12月まで発生が見られるため、薬剤の予防散布や被害の拡大防止に努める。
- ・ 被害残さは感染源となるため、ほ場外で地中深く埋めるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.1%）。ただし、一部の防除員からは平年に比べやや多い発生の報告がある。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発生を確認したら早めに防除を行う。幼虫は葉裏に生息するので、薬剤が葉裏にかかるように散布する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.2%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 結球内部に入ってしまうと薬剤が届かないため、発生が見られたら早めに防除を行う。

●タマナギンウワバ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率0.2%（平年0.2%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 幼虫の発育が進むと食害量が多くなるため、発生が見られたら早めに防除を行う。幼虫は葉裏を加害するため、防除の際は葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率0.2%（平年0.5%）と平年よりも少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本種は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早めに防除を行う。

【タマネギ】

<生育の概況>

生育は、平年に比べ7日程度進んでいる。

●腐敗病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.2%）。
- ・ 本病は細菌病であり、強風雨や多湿な環境により発生が助長される。1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 強風雨の直前または直後に予防散布を行う。
- ・ 発生が確認されたほ場では被害株を抜き取り、感染防止を図るとともに、抜き取った株は土中深くに埋めるなどして処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.6%（平年22.3%）と平年よりも少なかった。被害程度を示す被害度は4.5（平年8.6）と平年よりも小さかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 12月に入り気温が下がると、本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、暖冬の年は冬期も増殖して被害を及ぼす恐れがあるため発生に注意する。成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

【ネギ（シロネギ）】

＜生育の概況＞

生育は平年に比べ 10～15 日遅れている。

●さび病

予報の根拠

- ・ 11 月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 1.3%）。
- ・ 本病は、気温 10～22℃の時期に降雨が続くと発生が多くなる。1 か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・ 薬剤防除は予防散布や発生初期の散布の効果が高いため、予防散布を行う。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・ 11 月中旬の巡回調査では、平均発病株率 2.0%（平年 3.0%）と平年より少なかった。
- ・ 黒斑病の分生子発芽・形成適温は 24～27℃で、降雨が多いと発生が増加する。また、葉枯病の多発気温は 15～20℃である。1 か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 肥料切れで草勢が低下すると発病しやすくなるので、適切に施肥を行う。
- ・ 薬剤散布は予防散布や発病初期の散布の効果が高いため、予防散布を行う。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 11 月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 10.2%（平年 27.7%）と平年より少なかった。被害程度を示す被害度は 8.9（平年 25.8）と平年よりも小さかった。ただし、ネギハモグリバエの被害により見かけ上の被害が小さくなっていることが考えられた。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 12 月に入り気温が下がると本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、暖冬の年は冬期も増殖して被害を及ぼす恐れがあるため発生に注意する。成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は38.8%（平年15.4%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 今後は気温の低下に伴い発生は減少するが、発生が見られる場合は早めに防除する。
- ・ 本種は蛹が土壌中で越冬するため、多発生した場合は定植前に土壌消毒を実施すると防除効果が高い。

<その他の病害虫>

●黒腐菌核病

- ・ 本病は一旦発病すると防除が困難になることから、予防に努める。
- ・ 酸性土壌で発病が助長されるため、土寄せ時に石灰資材などで酸度矯正を行って土寄せする。
- ・ 薬剤による防除は、使用回数や使用時期に注意し、株元に処理する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.3%）。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げる 것이重要である。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●べと病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.2%）。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（本病は生育適温10～15℃であり、多湿条件を好む）。

防除対策

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・ 本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を、靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。

【イチゴ】

<生育の概況>

第一花房が開花～結実肥大期にあたる。生育は平年より遅い。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年2.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・ 一度、多発生すると防除が困難であるため、初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
12月以降は果実での発生も多くなるため、発病果は除去する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は3.1%（平年1.2%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出し、殺菌処理をしてから残渣を処分する。
- ・ 発病後の防除は困難であるため、発病前から定期的に予防散布を行う。特に下葉除去など株を傷つけるような作業後は重点的に行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ・ 開花～着果期は株に負担がかかるため、萎凋症状が進展する可能性がある。
- ・ 本病については、11月6日付で注意報を発表している（<https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujohp/BJchuuTOP.htm>）。防除に際しては参考にすること。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.6%（平年3.3%）と平年より多かった。
- ・ 今後、ハウス外からの侵入は少なくなるが、1か月予報では気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ アブラムシ類の発生に注意し初期防除に努める。
- ・ 天敵を利用しているほ場で薬剤散布するときは、天敵に影響が少ない薬剤を選択する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は8.1%（平年15.6%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ ハダニ類の寄生が認められた場合は、少発生のうち防除を徹底する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤や天敵を利用する。なお、物理的防除剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・ 天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を利用しているほ場で薬剤散布するときは、天敵に影響が少ない薬剤を選択する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.1%（平年0.4%）で平年より少なく、被害株率は2.7%（平年値なし、昨年3.9%）であった。
- ・ フェロモントラップによる誘殺数は平年よりやや多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本年は気温が平年並～高く推移しているため、12月上旬頃まで成虫の侵入が見られる可能性がある。発生初期の若齢幼虫期に防除を徹底する。

3 季節予報

● 1か月予報（東海地方 令和2年11月19日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 11月21日から12月20日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年に比べ曇りや雪または雨の日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	30	50
1か月	降水量	40	40	20
1か月	日照時間	20	40	40
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	20	40	40
3～4週目	気温	30	40	30

【予報の対象期間】

1か月 : 11月21日（土）～12月20日（日）

1週目 : 11月21日（土）～11月27日（金）

2週目 : 11月28日（土）～12月 4日（金）

3～4週目 : 12月 5日（土）～12月18日（金）

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>